

柿の甘いにおいがする、あの時は丁度テスト週間の真ただ中だった。家に帰って勉強をするためいつもより早く部活動を終え、自転車を進めようとした校門の前。見たことのないおばあちゃんがいまにもちぎれてしまいそうな袋をかかえて立っている。二・三分前にかいだことのあるにおいがした。ごつごつした袋の中の正体はきれいなオレンジ色をした柿だった。

「あのいちくぼってどこ知らんけ？」

困った顔から出た流暢な福井弁が私を引き止めた。学校から100メートル程離れたところにデイサービスがある。どうやらこのおばあちゃんもデイサービスの帰りで家まで歩こうとしていたらしい。そして、「いちくぼ」というのは、おばあちゃんの住んでいる地区の名前だった。

私は、自転車のかごの中に入っていた自分のリュックサックを背負い、ごつごつした袋をかごの中に入れた。私の通っている学校の近くには駅がひとつある。おばあちゃんの家は駅の近くだという。私は、電車で通学する時もあるので、駅までの道のりには慣れていた。そこで、とりあえずおばあちゃんを連れて駅まで歩くことにした。おばあちゃんの歩幅はとても小さく、十歩歩くだけでハアハア。息が切れる。私の自転車の荷台につかまり、ゆっくりゆっくり一生懸命歩いた。学校から駅まで、いつもなら十五分でつく道が、この日は一時間かかった。その一時間に私達はたくさん話をした。私の学校生活のこと、部活動のこと、今日の出来事：おばあちゃんと歩いた一時間は楽しく、苦ではなかった。だが、その間にひとつ気づいたことがある。おばあちゃんは時間がちよつとたつと、さつきも話したことを繰り返し聞くのだ。私は不思議に思った。

そして駅についた。おばあちゃんの家は駅の近くで、駅からなら分かれると言っていたので、私は少しほつとした。だが、おばあちゃんは

「ここどこだ？」

と言いだめた。そして追い打ちをかけるように

「ここじゃない」

と言った。どうやら自分の家がどこかさえも忘れてしまったようだ。私はこのおばあちゃんが認知症だということを確認した。家が分からないのでどこにも向かうことができなく困っていたところ駅の前に大きな住宅地図を見つけた。とつきにおばあちゃんに名前を聞いた。おばあちゃんは名前を覚えていて、私は地図上でおばあちゃんの家を見つけることができた。やつとおばあちゃんの家に行ける。おばあちゃんも自分の家分かかって安心して様子だった。そしていざ家へ向かおうと、足を進めた。だが、数分たつと、地図で自分の家を見つけたことさえ忘れてしまう。おばあちゃんを通りすぎる人、一人一人に「いちくぼってしらんけ？」とまたあの流暢な福井弁で問いかける。私はどうすることもできなかった。どこか、おばあちゃんのことを悲しく思えてきた。

私はそのままにおばあちゃんについて行った。すると、問いかけたあるおじさんが偶然おばあちゃんを昔から知っていると云う。おばあちゃんは昔よく一緒にゲートボールをしに行ったこの

おじさんでさえ忘れてしまっている。私はとても寂しくなった。きっとおじさんも同じ気持ちになったと思う。おじさんは私とおばあちゃんを目指していた家まで連れて行ってくれた。無事二時間の旅は終わり、家へたどりつくことができた。楽しかったり、悲しかったりとても濃い二時間だった。

おばあちゃんは畑が好きだと言っていた。そして私を畑へ連れて行った。きゅうり、なすび、ピーマン、ねぎ…たくさん野菜が畑ですくすく育っている。おばあちゃんはそれぞれを袋に詰めて私にくれた。

「ありがとう、また会おうね。」

そうおばあちゃんは言ったけど、私は知っていた。今日の出来事も私のことももう数分たつと忘れてしまうということ。そんな悲しい現実があることを私は知った。家に帰って、夜ご飯になるととてもおいしそうな野菜の数々。私は、一口一口今日のことを思い出しながら食べた。おばあちゃんが私のことを忘れませんように。そう願いを込めて…。

甘いにおいがする。柿の季節がやってきた。私は思い出す。おばあちゃんのこと。おばあちゃんも覚えているかな、私のこと。